茂吉晩年

上田三四二

茂吉晩年

上田三四二

彌生書房刊

© 1988

茂吉晩年

1988年12月10日　初版印刷

1988年12月20日　初版発行

著者　上田三四二

発行者　津曲篤子

発行所　株式会社　彌生書房

東京都新宿区中町18　電話・東京(260)3707(代表)

太陽印刷工業株式会社　／　大口製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります
落丁・乱丁本はお取替え致します
0095—88140—8525

茂吉晩年　目次

『つきかげ』の茂吉　七
『白き山』の茂吉　二八
『小園』の茂吉　四九
『霜』の茂吉　七一
昭和初頭の茂吉　九五
『白桃』『暁紅』『寒雲』時代　一一三
アララギ派と茂吉山脈　一三六
『赤光』と『朝の螢』　一三七

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

初版『赤光』と『つきかげ』　一四六
わがうちなる茂吉　一五四
生涯の真景　一六六
雁のイメージ　一七七
生国の山　一八四
風土と茂吉　一九八
あとがき　二〇八

茂吉晩年

『つきかげ』の茂吉

一

茂吉の文学を云々するに当って、『つきかげ』は、実はどうでもいい歌集であろう。

仮に、茂吉の歌集から『白き山』が失われたとする。戦後の茂吉の面目は丸潰れである。また『小園』を欠くとする。晩年の茂吉評価に重大な支障を来すこと必定である。しかし『つきかげ』にかぎって、この一巻が消えたとしても、歌人茂吉の存在の、にわかに片身になるおそれはなさそうである。

絶唱『白き山』ののちに、付け足りのような『つきかげ』のつづくことは、読者を戸惑わせる。敢えていえば、その興をさます。まして『つきかげ』は大歌人最後の集である。生涯を貫く十七冊の歌集に、壮大な交響曲を聞いてきた読者は、『小園』『白き山』とつづく終楽章の悲愴美に打

たれたのち、不意に、『つきかげ』の異様な溷濁世界にみちびかれて愕然とする。いや、『つきかげ』の声調が濁っているのではあるまい。『小園』『白き山』の声調が美しすぎるのだ。そうは思い返してみるものの、一大交響曲の最後にあらわれるこの一種異様な声調の印象は、読者を混乱させる。混乱させられて、読者はあるいはこう言うかもしれない。『つきかげ』さえ、なかったならば、と。

確かに、茂吉の歌が『白き山』で終るならば、その晩年の姿はまことにいさぎよく、明瞭かつ透明である。そこでは、彼の歌の難解さは消え、かわりに、不思議に冴えわたった悲しみの心といったものがあらわれる。——逆説と聞えようと、茂吉は敗戦に魂を打砕かれることによって、真に国民歌人の栄光の座に昇りついたのであって、戦中、あれほど叫喚の声をあげて到りつけなかったその座を、老残傷心の生んだ悲歌のかずかずが、願わずして一挙に手に入れてしまった、そんな趣きである。

かりがねも既にわたらずあまの原かぎりも知らに雪ふりみだる　（『白き山』）

あまりにも完璧であり、あまりにも古典的なこういう『白き山』の歌が、歌壇の内部は無論だがそれよりもむしろ、歌壇の外に与えた衝撃の大きさを私は思いかえすことができる。戦後も、相変らずみじめであった人の心は——強いられた価値の転換を秩序の解体として受取るほかなく、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

一切の拠りどころを失って浮遊する人の心は、この古代さながらの声調が沈痛の美をかがやかせながら聳えたつさまを見て驚かされる。そして、驚きはまた救いだった。こんなすがすがしい日本の言葉が、いまに生きていようとは人々は思ってもみなかった。もっとも人々は、そのすがすがしい日本の言葉が戦後風俗のまだとどかぬ東北の片隅にあって、詩人のどんな寂寥と孤独の心から生れたかを、思ってみようともしなかったであろうが。『白き山』の歌は、こうして、まるで奇蹟のように北方の辺土より降りそそいで戦後のこの国を浄め、人々の乾いた胸に沁みとおっていったのである。

そうした世捨人の茂吉にも、やがて魂の憩いの地、最上川のほとりを去って、戦後風俗の中心地、東京にもどる時がやってくる。昭和二十二年十一月、数え年六十六歳の茂吉は山形県大石田を引上げ、『つきかげ』は、あたかもこの東京帰還の昭和二十三年より歌い出されるが、歌い出されたとき、その歌ごえは『白き山』とまるで違ったものになっていた。

『つきかげ』を『白き山』からへだてる著しい肌合いの相異は、当時の茂吉に甚だしかった老耄の亢進という、生理的現象をのみもってしては、了解しがたいものがあるだろう。それは、東北の風土と東京の風俗——戦後という特殊の時代ゆえに、いっそう対比の目覚ましかった環境の激変を背景とし、その上に、「残年はあるか無きかの如」（『つきかげ』昭和二十三年）き老茂吉を置くことによって、はじめて了解に達し得るもののように思われる。

赤彦なら、環境の激変も、ものの数でなかったかもしれない。『太虚集』に澄み入り、『柿蔭集』へと歩いて五十年の生涯を終った赤彦に、いま『小園』と『白き山』の茂吉を重ねあわせ、『柿蔭集』ののちに仮に赤彦の『つきかげ』を想像するとすればどうだろう。定めし赤彦の『つきかげ』は、迷わずして『柿蔭集』の大道に副って閑寂の気息を貫いたことであろう。しかし茂吉は迷った。迷って『白き山』のあの沈痛の語気を後ろにしてしまったのである。

いや、迷ったとしてはならない。なぜなら、この環境順応の自在さこそ、茂吉の「写生」の態度に外ならなかったから。茂吉の「写生」は、本来「他力随順」のパッシビズムに徹し、「実際の機縁に順応しつつ作歌する」（「現代の短歌」）自然法爾の柔軟性――一歩を謬ればオポチュニズムに堕ちかねない柔軟性を特徴としていた。老いて、「残年はあるか無きかの如」しと観念する茂吉に、この柔軟性のまだ失われていなかったのは驚くべきことだが、かかる覚悟から発して、茂吉はふたたび新しい「機縁」に向って耳目を開く。「機縁」は、東京にかえって茂吉のはじめて触れた戦後風俗という驚嘆すべき現象であり、この現象に向って、『白き山』の澄明な発想のすでに力およばぬことを茂吉は知っていた。

二

東京もすっかり変った。この感慨は、自らを「むく鳥」と呼んだ言葉のなかによくあらわれている。

帰京の年の暮、茂吉は時事新報社の依頼で一日東京見物に出かけた。銀座、日本橋、浅草六区をはじめ、「喫茶街」玉の井や鳩の町をめぐり、クリスマス・イブに賑わうダンスホール「メリーゴールド」までも覗いて来た。翌、昭和二十三年一月の新聞に連載された「むく鳥印象記」がその時の見聞にもとづくものであることは言うまでもないが、「印象記ノ名ヲ『むく鳥印象記』ト命名、むく鳥ハ田舎者ノ義デアル」と日記（昭和二十二年十二月二十六日）にも書いたその複雑に屈折する気持の反映は、省略のきいた不思議な味わいの文章のなかに、まことによく捉えられている。

「三年間、東北の辺土に過ごした自分は、只今リツプ・ヴアン・ウインクルのやうな顔付をして、銀座街十字路のところに立つてゐる。実にあざやかな交通整理に、群衆の次から次へと運ばれるありさまは、田舎もどりのこの老翁にはなんともいへぬ光景であつた。そのなかに一メートル半ぐらゐの短身矮軀の女がゐた。おやおやと思つて見ると、その靴も靴下も外套もパーマも口

脣も、もはや地についた調和である。さうしてたつたつと歩いて行つた。ああ復活の第一歩はやはり女性にあつた。」

「ねえ、三枚でもいいわ。（略）けばけばしい衣裳にしどけない細帯をしめて、ああ愛すべきフヨーニキスよ、可憐なる不死鳥よ。お前達を中心にしても、また東京は復興するのである。」

「娘はにこにこして、『うちは二人よ。分散していらしてネ、あがつてよ』といつた。僕らの同行は、青年と老翁とを交へて四人であつたからである。彼女らはブンサンの語を平然として使ふまでに進歩してゐた。」

「嘗て、お前達の朱脣を嘗むるとき、その味ひ飴よりも甘いといはれたものである。（略）この新興喫茶街の健康なる肉体！　この健康が日本再建の原動力たり得るのだとおもへば、自分もまた天下の為政者と共にこの健康なる朱脣を祝福せずにはをられぬ。」

開放された性の風俗を活写する茂吉の熱っぽさは、『小園』『白き山』時代には見られなかったもので、遡って、日中戦争時代、「宋美齢夫人よ汝が閨房の手管と国際の大事とを混同するな」と歌った『寒雲』時代の茂吉を思わせる。しかし、こうした刺戟に満ちた現実に対決するには、茂吉の現身は見るかげもなく衰え、その老身の反省が、彼をしてさすがにこんな言葉を吐かしめる。

「この里に老人入るべからずといふことは、不文律にして、人間的肉体的理法としていつの間

にか行はれた。されば、老翁が空山にうそぶくことがあつても斜里に泥酔することは、絵に画かうとしても絵にならぬのである。

田舎もどりのこの老翁が、ヒポクラテース、ガレーヌスの後学として年寄つたことを、言訳のただ一つの理由として、この里に立入るといふのはをかしな話である。されば理由はこれを他に求めねばならない。」

例によって、文意はわかるようで、わからない。が、ただ一つ、ここに、猥雑で活気に満ちた戦後復興の息吹きを「喫茶街」女性の肉体に見、それを、ほとんど溺迷にちかい老いの嘆きをもって受けとめている、茂吉の心情の複雑さだけは、あやまたず読むものの心に伝わってくる。

「印象記」を茂吉は三首の歌で結び、その最後の一首をこう歌う。「みちのくの山より来たり椋鳥が一こゑ鳴きていざかへりなむ」と。そうして、一こえ鳴いて帰ったところに茂吉を待つ老いの境涯は、おおよそ、次のようなものだった。

残年はあるかなきかの如くにて二階にのぼり真昼間も寐ぬ　（昭和二十三年）

香の物嚙みゐることも煩はしかかる境界も人あやしむな

みづからの落度などとはおもふなよわが細胞は刻々死するを

朝のうち一時間あまりはすがすがしそれより後は否も応もなし　（昭和二十四年）

夜な夜なに胸のあたりがいきぐるしこの世の果にわが来しごとく
一言もいふこともなく床ぬちに「年ふりにたるかたち」入りぬる　（昭和二十五年）

この境涯に安住しうる茂吉であったなら、『つきかげ』の歌境はまた別の平静なものになったことだろう。が、茂吉は老いのうちに安住の境を見出し得なかった。「むく鳥印象記」のようなあくの強い文章の書かれた所以だが、そうでなくても、茂吉のうちには、絶えて平静であり得ないさまざまの動因が渦巻いていた。その心を、茂吉はこう歌う。

年老いて心たひらかにありなむを能はぬかなや命いきむため　（昭和二十三年）
年老いし翁はしづかにありなむをしづかに吾はありがてなくに　（昭和二十四年）

また茂吉はこうも書く。

「宋の真山民の詩句に、『心空うして、諸妄息み、身老いて、万縁軽し』といふのがある。年老いたものは、誰でもこの境界をあんあんのうちに想像するであらうが、実際はなかなかうはまゐらぬ。

私のごときも、大石田の疎開先から東京へ帰つて来て、それ以来は、『万縁軽し』の境界に入

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com